

月刊

2011

1
月号

みんぱく

特集 ウサギ

ベトナムの卯年 大西 和彦

ウサギの意匠 岩崎 均史

アメリカン・ラビット 巽 孝之

アリスと地下世界 宗宮 喜代子

玉兔のマカオ館 中牧 弘允

兎狩りをめぐる民俗 天野 武

ウサギ料理の「トラウマ」 宇田川 妙子



最近のインドはITの国として知られ、インドにおけるIT産業の発展は、しばしばインド人の数学的頭脳の強さによるものとして説明されている。それと関連して、彼らの計算力の強さが注目され、その数学教育への関心も高まっている。でも、それは単に、数学的頭脳だけの問題なのだろうか。

今から二〇年ほど前、私はチェンナイ(旧マドラス)で、日本のある家電メーカーの技術者と一緒になったことがある。その人は、当時もてはやされていた「フাজィイ論理」についての講演をしに来たのだが、彼によると、この論理は日本で人に話しても、なかなか分かってもらえないのだが、インドの人たちは、皆よく分かってくれた。不思議に思つて、その理由を聞くと、「この論理は、インド哲学で説かれるのと同じで、だから自分たちにはすぐ分かる」という答えが返ってきた。「先生、そんなんですか」と聞かれたが、残念ながら私には、フাজィイ論理そのものが、「曖昧さ」の論理ぐらいしか分かっていなかったので、そのときは、どうとも答えようがなかった。

ここでインド哲学に関連して言えば、ヒンドゥー教的な神話世界において、神様は、シヴァ神、ヴィシヌ又神をはじめとして、たくさん存在している。そして、パールヴァティーがシヴァ神の妃だ、ガネーシヤがその息子だという

プロフィール

東京生まれ。東京大学文学部卒業。東京大学名誉教授・大正大学名誉教授。インド刻文学会会長・国際タミル学会会長・日本南アジア学会理事長・日本学術会議会員等を歴任。著書 *History and Society in South India* (New Delhi, 2001) により、日本学士院賞を受賞。文化功勞者。



インド哲学とIT産業

からしまのほる
辛島昇

のは、神話での設定として、それなりに理解されるのだが、有名な叙事詩『ラーマヤナ』の中で実在的存在として描かれているラーマが、実はヴィシヌ又神の化身だ、などと言われると、その変幻自在振りいささか戸惑いを感じる。多少の知識なら我われももっている「梵我一如」ということにしても、「梵」が宇宙原理、「我」が個人としての自己だというのはいい。ただ、それが、実は、その両者は同じもので、そのことを悟ることによって解脱できるのだ、と言われると、やはり戸惑ってしまう。

この、「実は」というところが曲者で、インド人の数学的頭脳も、単に計算力とか、正確さだけが優れているのではない。科学においても、どんなことにおいても、現実の世界においては、「実は」ということがあるのだということを、インドの人々は、哲学や神話から学び取っているのであらう。正確さだけを求めるのではなく、曖昧さをも認める、二枚腰的思考の柔軟性がインドの人々にはあり、そのことが、IT産業の発展をもたらししているのではないか。インドIT産業の雄「インフォシス」のムールティ名誉会長が重視する「変化への対応」も、それを意味しているに違いない。

月刊
みんぱく
1月号目次

1 エッセイ 千字文
インド哲学とIT産業 辛島昇

2 特集 **ウサギ**

- 3 ベトナムの卯年 大西 和彦
- 4 ウサギの意匠 岩崎 均史
- 5 アメリカン・ラビット 巽 孝之
- 6 アリスと地下世界 宗宮 喜代子
- 7 玉兎のマカオ館 中牧 弘允
- 8 兎狩りをめぐる民俗 天野 武
- ウサギ料理の「トラウマ」 宇田川 妙子

10 研究フォーラム
内陸アジアの宗教復興
藤本 透子

12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
寧波滕頭実践例館
上海万博より
横山 廣子

15 みんぱく 私の逸品
蚊取り線香
吉田 晶子

16 散策と思索の径
スリンの〈異世界〉を逍遙する
津村 文彦

18 多文化をささえる人びと
日本語を伝え多文化を教わる
——甲南大学日本語教室「あおぞら」
金 美善

20 歳時世相篇
年賀の薦樽
近藤 雅樹

22 フィールドで考える
ミャオノモン女性をとりまく刺繍と文字
宮脇 千絵

24 次号予告・編集後記

特集

ウサギ



年末年始に恒例となった干支(エト)展が開催されている。今年は卯年、ウサギの年である。みんなの展示場にはどんなウサギがいるだろう。普段は収蔵庫で眠っているウサギも登場している。この期間だけは、展示場と収蔵庫の「二兎を追って」もらえる。さて、本号は、このウサギ年にちなんだお話をとおとけする。といって、のっけからウサギ年のかわりにネコ年という話がある。つづいて「脱兎の如し」「兎の上り坂」といったことばにもつながる日本人がもつウサギのイメージである。一方、欧米ではどうだろう。イソップの「ウサギとカメ」は有名だが、アメリカン・ラビットや「不思議の国のアリス」に登場するウサギのイメージといったちよつと大人の話。マカオでは都市そのものがウサギとして表象される。最後は日本でウサギを捕らえて、イタリアで食べる話へと続く。「兎に角」^と、どのお話も「兎の角論」^{つのもん}ではないはずだ。

兎面(日本 東京都) 標本番号 H0014583

ベトナムの卯年

大西 和彦 ハノイ宗教研究院客員研究員

ウサギ年は、ベトナムではネコ年だ。なぜウサギがネコになるのだろうか。まずそれは、ベトナム語の発音では卯「マオ」と猫「メーオ」が似ているからだろう。

一七世紀のベトナム語辞書で「時刻」の項目を引くと、当時は寅(午前三時~五時)から始まる十二支を用いた時刻を使っていたことがわかる。寅の次は卯の時刻(午前五時~七時)である。しかし、その卯の発音はすでに元の「マオ」ではなくて現在のベトナム語で猫を意味する「メーオ」に近い「メオ」という発音記号で記されている。ベトナム語では卯も猫も喉の気道を閉めたように似た発音をするから、このような変化が起きたようだ。

さらに、この辞書は卯の時刻に「猫の時刻」という解説を加えている。従って一七世紀には猫はすでに時間の単位として数えられ、しかも卯は猫に変わりつつあったのだ。

そしてベトナムには「子猫は子

鼠を捕らえる(どんなことも、起こりうる)」などネコの諺はとて多く、ウサギの諺はほとんど無い。農業国のベトナムでは稲を荒らすネズミを退治するネコがよく飼われたので、ネコの方がウサギより身近な存在であるからだ。こうして発音の類似と親近感により、卯の時刻が猫の時刻へと置き換わっていったようだ。

またベトナム人にとって、ネコは神秘的な存在でもある。たとえば葬式の際にネコを棺おけに近づけない。ネコは陽の気が強いので、陰の気の強い死体が引き寄せられ起き上がるのを恐れるからである。

しかしネコを恐れるだけではない。酸っぱいスターフルーツの木の根元にネコの死体を埋めると、その陽気の名残りで甘い実がなると信じている。また彼らが「小さなトラを食べよう」というとき、小さなトラはネコの隠語だ。そんなベトナム人のしたたかな思いがあるネコの年を今年も迎える。

ベトナムのドンホー版画「ネズミの婚礼」。ネズミがネコに贈り物をして婚礼の許可を求めている画だが、何事にも権力者(ネコ)が賄賂を要求する習慣を風刺している



もちつきをするウサギの人形(日本 大阪府) 標本番号 H0107736



ウサギの背中にまたがって座り、先端の金具でココヤシの実を削り取る(タイ) 標本番号 H0169586

ウサギの意匠

岩崎均史 たばこ塩の博物館主席学芸員

ウサギ意匠の流れ

日本の美術工芸史のなかで「ウサギ」がどのように描かれ、形造られてきたかを概観する。上代の作品からは、中宮寺『天寿国繡帳』中の耳の短い猿のようなウサギ、高山寺の『鳥獸戯画』中の擬人化された画の中を自由闊達に動き回るあまりにも有名なウサギたちなどを思い浮かべることができよう。その後、近世に至るまでに「月宮殿」「竹生島」「木賊」「守株の愚」など、古典や故事に登場するウサギを意匠化したものが知られる。また干支の卯にウサギが配されたこともあり、卯年の摺物や年に関連した造物などにさまざまなウサギの姿を見ることができ。明治に入るとウサギを愛玩動物として飼うことが流行り、浮世絵版画で「兎絵」とよばれるウサギを主題とした絵が定期的に流行することもあった。明治以前には、ウサギは飼育される、あるいはペットとしての愛玩動物であった例はきわめて少ない。つまり絵画や工芸のモチーフとして描かれたウサギのほとんどは日本各地に生息していた野兎であったのだ。

ウサギのイメージ

古来、ウサギのイメージとして、小動物としての可愛らしさがあつたのだから、人間になれていない野兎は「脱兎」のごとく人を見れば逃げ出すのであつて、その機敏さも意匠の対象となつてい。また、ウサギ形の兎や刀剣の拵など、武器武具の意匠にもウサギは登場する。これは、ウサギが上り坂は得意だが、下り坂は苦手という生熊から、「立身出世」が表現されたといわれる。大きな耳で、戦場の動きや変化に対応する気構え、その機敏な動きなどが、武士階層に好まれたのであろう。他に、尻を合わせたウサギには「夫婦和合」「子孫繁栄」をあらわすという例もある。

「波兎」と「木賊兎」

さて、ウサギの意匠で、絵画・工芸の差なく、もともとも用いられたものは、「波兎」と「木賊兎」ではないだろうか。ともに意匠の元になるのは謡曲で、波兎は『竹生島』、木賊兎は『木賊(刈)』から発生している。竹生島は琵琶湖の中央北



紫檀波木地時絵たばこ盆
(火屋に銀のウサギ、たばこ盆上にも波の木彫、たばこ盆全体で「竹生島」の意匠になっている。たばこ塩の博物館所蔵)

部にある鳥の名称で、都久夫須麻神社の存在が、古くから信仰の対象とされ、ここに祭られた弁財天の霊験が伝えられるこの信仰を背景として謡曲『竹生島』が存在する。「月海上に浮かんでは、兎も波を走るか 面白の鳥の気色(景色)や」と謡われたこの部分が、波兎意匠の原典

である。月が海面(琵琶湖の呼称である近淡海)に映ると、月のなかのウサギが竹生島を目指し水面を走る、という様子が意匠化される。波のあいだを走るウサギ、水面に映る月(空にも月)という構成であり、この意匠を「竹生島」ともいう。いまひとつの「木賊」は、世阿弥が源仲正の「木賊刈る 園原山の木の問より みがきいでぬる 秋の夜の月」という和歌をもとに記したものである。「みがきいでぬる」が、木賊が器物を磨くことに用いられたこと、ウサギが木賊で歯を磨くといわれたことと結びつき、さらに「秋の夜の月」で月にウサギが掛けられているといわれる。「木賊」は、長唄や歌舞伎舞踊の「木賊刈」が江戸時代繰り返し舞台で演じられ、広く庶民にも広がった。こうして木賊にウサギが配された絵画や意匠が近世以降に登場するのである。

いずれの意匠も物語を超えて、古典的・典型的なウサギの意匠として今日まで繰り返し長く用いられている。原典は知らなくとも、これらのウサギの意匠を見たことのある方は多いのではなからうか。

アメリカン・ラビット

巽孝之 慶応義塾大学教授

現代アメリカでウサギといったら、ジョン・アップダイクが典型的なアメリカ小市民の夢と挫折を託したハリ・アングストロームの物語、すなわち一九六〇年以降書き継がれた『走れウサギ』四部作や、男性誌『プレイボーイ』のシンボルともいえるパニーガールたちのすがすがしさが、たちまち思

「ルーニー・テューンズ」に登場するバグズ・バニーから、ウォルト・ディズニー社系の八八年映画『ロジャー・ラビット』のタイトル・キャラクターにいたるまで、ウサギは夢を失わずユーモアとウィットで過酷な現実を乗り切ろうとするアメリカ小市民を巧みに体現してきたのだから。

い浮かぶ。両者は一見まったく無縁に見えるものの、かたや日常性の打破を虎視眈々と狙う精神において、かたやこの動物の愛らしさと一年中発情期が続くかのような多産ぶり、転じては性的魅力を象徴する形象において、多くの民間伝承で語り継がれたトリックスターとしてのウサギ像とも、さほど矛盾するものではない。じつさい、一九四〇年代からワナー・ブラザースが製作し続けた人気アニメ作品

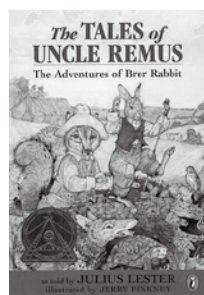
もともと英語の決まり文句としては、古くから「三月ウサギみたいに狂つて」(Mad as a March hare、という言い回しがおなじみで、それはイギリスにおけるウサギの繁殖期が二月から九月まで続いたためであった。英文学史上の巨人ジェフリー・チョーサーやトマス・モアもこの慣用表現がお気に入りだったが、何とんでも一氣に広く知られるようになったのは一九世紀の作家ルイス・キャロルが『不思議の国のアリス』(一八六五年)を発表し、白



パニーガール

ウサギの縦穴」を通り抜けて地下の幻想世界へさまよいこむ少女を主人公に、文字どおり気狂い帽子屋と仲のいい「三月ウサギ」を登場させて以来だろ。二〇世紀に入ると、アメリカ南部はセントルイスに育ちながら、のちに英国へ帰化しノーベル文学賞に輝くまでに昇り詰めるモダンズム詩人T・S・エリオットが、じつはアヴァンギャルドな出世作『荒地』(一九二二年)発表直前に、文字どおり「三月ウサギの調べ」なるタイトルの詩集刊行をものくろんでいた。これはもちろんキャロルの『アリス』の影響色濃い命名だが、同時に彼が一九二二ごろから、師匠エズラ・パウンドとのやりとりのなかで、自分自身を動物にたとえるのに、白人でありながら黒人民間伝承収集に余念のなかった作家ジョエル・チャンドラー・ハリスの『アंकフル・リーマス』シリーズに出てくるポッサム(フクロネズミ)や、いまでは黒人女性作家トニ・モリスンの小説でも有名な黒人の人形「タール・ベイビー」を引き合いに出したり、ハリエット・ピーチャー・

ストウ夫人の小説の主人公である黒人奴隸「アंकフル・トム」の真似をしてみせたりしていた記録を忘れることはできない。自らの白人の主体を黒人に偽装するという、何ともトリックスター的いたずら心に満ちた民族異装! そう考え直してみると、エリオット原案の人気ミュージカル『キヤッツ』にしても、姉妹猫の救済劇どころか、黒人民話の変型がもくろまれていたのかもしれない。それは、人類と動物のかかわり自体にもひとつの民族問題が控えていることを、実感させてくれる。



ジョエル・チャンドラー・ハリス原作を翻案した、ジュリアス・レスター語りのペンギン版『アंकフル・リーマス物語』(1987年)。表紙・挿絵ともにジェリー・ピンクニー

アリスと地下世界

宗宮 喜代子 東京外国語大学大学院教授



「大変！遅刻する！」（白ウサギ）

二匹のウサギ

ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』には、二匹の「ウサギ」が登場する。一匹はアリスを地下世界へといざなう白ウサギ (White Rabbit)、もう一匹は個性的な三月ウサギ (March Hare) である。「名が体をあらわす」ことを鉄則とするこの国では、普通名詞がそのまま個体の名前になる。二匹はそれぞれ「穴ウサギの rabbit は hare よりも小型で地中に穴を掘って群居し臆病」、「野ウサギの hare は rabbit より大きく後足と耳が長く穴居性がない」と

いう辞書通りの特徴を備えている。著者キャロルの言によれば、白ウサギは年寄りで、若くて大胆で行動的なアリスと対照的な存在として位置づけられる。

大変！遅刻する！

白ウサギは、物語に始めと終わりを与える役回りである。名前が示唆する通り穴に走りこむウサギを追って、アリスの地下世界での冒険が始まる。この白ウサギが「大変！遅刻する！」と時計を見ながら焦っているのは、物語の終盤で開かれる裁判がすでに始まるうとしていているからである。尋常な世界では、できごとは時の流れに沿って展開し、原因が結果に先行するのだが、不思議の国では時が流れず、因果は逆転しかねない。時が流れなかったり、名が必ず体をあらわしたりするのは、不思議の国が古典論理の実験場であるためだ。著者が古典論理学者であったことは、



「鏡の国」の使者として三月ウサギが再登場

を通して、地下世界ならぬ形而下の、物理的現実の重要性を訴えたのである。

三月ウサギは特に著者のお気に入りの中で、『鏡の国のアリス』にも登場する。ここでも名が体をあらわす古典論理の鉄則にしたがって、「帰りの使者」とよばれる三月ウサギは「帰る」という行動だけをする（「往きの使者」は帽子屋である）。行っていないのに帰ってくる使者などというものは概念の化身に他ならず、キャロルの挑戦のあらわれである。



「法廷では静粛に！」（白ウサギ）

キャロルは、現実を顧みない古典論理の形而上学的な伝統に挑戦した。白ウサギ、三月ウサギ、その他のキャラクターのナンセンスな言動



イジー・トゥルンカが描くアリスと白ウサギ

アリスの物語を理解するうえで重要なポイントである。

奇妙なお茶会

神経質な白ウサギがアリスと人間関係(?)をもたないのに対して、奇妙なお茶会での三月ウサギは大いに会話をする。とはいえ帽子屋 (Hatter) も参加しての理屈合戦で、少しも楽しくはない。時が止まっているためいつもお茶の時間で、もう何日もここで食卓をかこんでいるらしい。彼らの時計は時刻を知るためのものでなく日付だけを示すのだが、油ならぬバターを注したせいか狂ってしまい、紅茶にドボンと浸してみても(ー)直らない。



「最高のバターだったんだが」(三月ウサギ)

玉兎のマカオ館

中牧 弘允

民博 民族文化研究部

閉幕した上海万博のメイン会場の中央にそびえたつ中国国家館は「東方の冠」と称され、古代皇帝の王冠を模していた。他方隣接するマカオ館はかわいいウサギの格好をしていた。なぜかというところ、マカオの地形がウサギに似ているからであり、くわえて中国に返還されたのが一九九九年の卯年だったからである。そのため建物の高さも一九九九年の卯年に設定されていた。

建物の外壁はハーフミラーで、周囲の光景を映しだし、かつ夕暮れからはカラフルなイルミネーションで彩られる。ウサギの頭と尻尾は風船でつくられ、ゆらゆらと左右に揺らめき、胴体は色が連続的に変化する。あたかも生命を吹き込まれたかのようにある。じつは、このウサギ、ただの兎ではない。月にいる玉兎なのである。日本では餅をつき、中国では薬をつく、あの縦杵をもった神話的なキャラクターなのである。

玉兎に対応するのは金鳥である。金鳥は三本足のガラスで太陽にいとされる。玉兎と金鳥は月と太陽、すなわち陰と陽の関係にある。マカオ館のパンフレットをみると、昼間は中国国家館を映す鏡であることわざ明記している。そして夜は館全体が灯火となつて「玉兎宮灯」を演出する。それは国家館のメインストリートを照らし、特別行政区としてマカオと中国がつながることを意図している。月が太陽の光を反射し、夜道を照らすことの象徴的表現がそこには見事に表象されているのである。かくのごとくマカオ館はウサギの多義的なシンボルとして異彩をはなつてきた。

ウサギの形をした上海万博のマカオ館



兎狩りをめぐる民俗

天野武 帝京大学元教授

兎にちなむ地名が全国各地に点々と七三〇カ所を数えること、『古事記』に因幡の白兎説話が見えること、国宝『鳥獣人物戯画』(甲巻)や「かち山」「兎と亀」なる一群の動物にかかわる昔話に擬人化され描かれてきたこと、一五〇余件におよぶ異名(別称)が確認できること、文部省唱歌『故郷』冒頭歌詞の一節に「兎追いしかの山……(後略)」と明記されていること、などから推し



ワダラ(威嚇猟具) 投げ
新潟県中魚沼郡津南町見玉
(提供・十日町市博物館)

て、人びとと兎との交渉(共生)は古くからごく近年まで濃密だったことを疑わない。両者間の交渉の一部と目される狩猟活動においても例外ではなく、その多彩さが注目をひく。最近では、生態系の変化や里山の変貌などにより激減したが、大正一〇年代からはじめられた狩猟統計によれば、捕獲数が獣類中ダントツに多かったのが兎。一時代、年間八〇万羽〜九〇万羽を数えた。『猟具解説』(農林省畜産局、昭和二年)には各地方に伝わる猟法名などを網羅して、往時の兎狩りの猟法を知るのに有益である。いずれも、兎の習性を熟知しそれを逆手にとって臨んだ猟者が少なくなかった。その主要なものを類型化して記してみよう。

① タカ使い猟法。クマタカ(熊鷹)を捕獲・調教、それを使役して主として地上を生息舞台とする兎を捕ら

える猟法。秋田県仙北市田沢湖周辺の北浦地方、鳥海山麓の村々、秋田県南から山形県北部真室川町地方などに分布してきた。クマタカは図体が大きいだけに地上の兎を狙わせるのが得策と編み出されたのだろう。

② 威嚇猟法。猛禽類が獲物を掴んで飛び去るのにヒントをえたとするもの。猟具を投げ飛ばすとか振り回すとかし、それに伴って発生する唸り音と影の二重効果により天敵鷲鷹類が急襲したように擬装。その威嚇効果により雪穴へ逃げ込んだのを生捕りにする猟法。兎を対象とする場合が典型的である。さまざまな棒切れ片のほか、ワラタ・ワダラ・ウス(ワシ)・マル・ワテ・シユウターなどとよばれるのが投げ飛ばし用猟具。ブイブイ・カゼキリ・ナワテッポウと称されるのが振り回し用猟具。東北日本の雪国を中心に広く分布(表参照)。

③ 罾猟法。冬眠することなく採餌する兎に着目。けもの道、ウジなどによばれる位置に仕掛ける。オシ(押し)・ククリワナ(括り罾)・トラバサミ(虎挟み)・オトシ(落とし)・陥穽(かみ)など態様は少なくない。

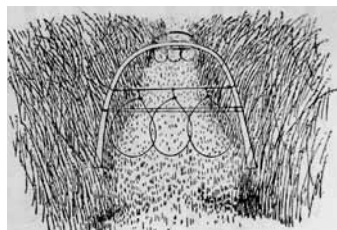
④ 猟銃(鉄砲) 猟。単独で出猟することもあれば、猟犬を伴った場合、勢子とともに巻狩りに臨む場合、など実際のところ変化に富む。

かくも兎を入手しようと努めた背景には、猟果がさまざまに生活に組みこまれたことに関係した。肉・骨などが食材に供された。ウサギカヤキ、ホネタタキ、ミミヤキなどがその好例。その目玉が雪目治療の薬用とされたこと、四肢先が化粧刷毛・白粉刷毛や子どもたちの遊戯用などに広く愛用されたことも見過ごせない。

(表) 威嚇猟法の確認地区数

府県名	地区数
青森	12
岩手	25
宮城	5
秋田	77
山形	47
福島	28
栃木	1
群馬	11
埼玉	4
新潟	112
富山	53
石川	66
福井	16
長野	21
岐阜	44
静岡	1
滋賀	11
京都	5
兵庫	7
鳥取	18
島根	17
岡山	18
広島	5
徳島	3
愛媛	4
宮崎	1
合計	612

(平成 22 年 10 月末日現在)



括り罾猟の図
農林省畜産局『猟具解説』(昭和2年)



罾掛法の図
農商務省
『狩猟図説』
(明治 25 年)



ワテ(長野県北安曇郡白馬村
切久保・深空)



マル(秋田県由利本荘市
鳥海町上笹子皿川)



ワダラ(威嚇猟具) 投げ
岩手県和賀郡西和賀町太田
(提供・若祥寺博物館)

ウサギ料理の「トラウマ」

宇田川 妙子 民博 民族社会研究部

わたしはローマの近くの町に調査のため二年ほど住み込んでいたが、その間、彼らもわたしの行動から「日本人の習性」をいろいろ学んだようで、そのひとつが、ウサギにまつわる話である。事の発端は、その町でおこなわれたある祭り。知り合いがゲームの賞品としてウサギを二羽獲得して喜んでいたら、わたしが思わず「かわいい」といったら大爆笑だったのだ。

イタリアでウサギといえは食べるもの。その柔らかい肉は大変好まれるが、野生のウサギはいなくなつたし肉屋でもほとんど売っていないから、手に入る機会が少ない。だから今回みんなで喜んでいたら、この日本人は……というのが彼らの弁だ。ウサギは「かわいい」ではなく「おいしそう」というべきだ、という講義まで受け、翌日には、日本ではウサギを食べずにペットにするらしいという話が、なぜか笑い話としてあちこちに伝わった。しかもこの知り合いは、ウサギの食べ方を知らない日本人のために料理をしてあげようと申し出てくれたのだが、それまでウサギの世話をする

のは、ペットにするほどウサギを大切にする日本人のわたしというおまけつきだった。

そして数週間後、出来上がったのは「漁師風ウサギ料理」。さばいた肉を数時間水につけた後、トマトとワインや香料などで煮込んだもの。別名、ウサギ料理で有名なイスキアという島の名前をとって「イスキア風」ともいい、イスキアでは日曜日に家族・親族みんなで食べる習慣があるのだそう。わたしだってウサギ料理があることくらい知っていたし、日本でも食されていないかわけではないし……とブツブツいいながらひと口食べると、本当においしい。ちよつと悔しかったけど、確かに自慢の一品だった。

あの「トラウマ」からほぼ二〇年。わたしはウサギを見るとまた複雑な気分になつてしまつたが、最近はいタリアでも、ウサギが癒やしのパペットとして注目されつつあるという。でも、ウサギ料理がちよつと特別な日のごちそうとして愛され続けていることに、変わりはない。



ウサギのイスキア風
(提供・イタリア ナポリ料理のお店 パンビーノ)



内陸アジアの宗教復興

藤本 透子
民博 機関研究員

本館では、若手研究者を育成・支援することを目的として、若手主体の挑戦的な共同研究を募集している。今回はそのひとつを紹介する。

よみがえるカザフの祝祭

草原にカザフの天幕（移動式住居）が数多く建てられ、その内部では豊富なウマ肉料理がふるまわれて、死者たちのためにクルアーン（コーラン）が朗唱される。やがて、馬上競技と競馬がはなやかに始まる……。アスとよばれる伝統的祝祭の光景である。

一九世紀の文献にあざやかに描かれるこの祝祭の現代版を、わたしがカザフスタンで初めて見たのは一九九九年のことだった。カザフスタンがソ連邦の一部だった約七〇年余りのあいだ、この祝祭はほとんどおこなわれず、カザフスタン独立後になって復興したのである。

祝祭に欠かせないカザフの天幕は、民博本館の中央・北アジア展示に実物を見ることのできる。カザフの天幕は世界観をあらわしており、炉と天窓は家族の象徴、入口は死者の霊魂が戻ってくる場所とされる。すでに天幕が日常生活で使われることはないが、近年になって祝祭に多く登場するようになった。

現代における伝統的な世界観や宗教の復興は、何を意味するのだろうか。

内陸アジアの多文化世界

宗教的な祝祭が復興したり、人びとが宗教に関心を高めたりしているのは、カザフスタンにとどまらない。周辺地域に目を転じ

したという、単純な図式では理解できない。また、復興した宗教も伝統的な形態そのままではなく、現代的な適応を遂げていることが、次第にわかってきた。

越境する宗教

現代における宗教復興へのアプローチとして、もうひとつ重要と考えられるのが、地域社会の人びとの越境への着目である。内陸アジアやその周辺地域では、政治体制の変化にもなつてたびたび国境を越えた移動が生じた。ひとつの民族であっても、国境によって隔てられたことにより宗教的知識に多寡が生まれるなどの変化もみられ、再び行き来できるようになったとき、どのような現象がおきるのか注目される。

これまでのところ、チベット人の寺院再建がじつは越境によって支えられていることや、タイ北部の雲南系イスラーム教徒のモスク建設は、移住者が故地とつながることによって実現しえたことなどが共同研究員によって明らかにされている。冒頭で述べたカザフスタンに話を戻すと、復興した祝祭でわたしが見た伝統的な移動式住居は、じつはモンゴル国から移住してきたカザフ人のものであった。

国家体制の変化やそれともなう越境は、生と死、性、病いといった、人にとって根源的な問いを顕在化させる。現代における



復興した祝祭にて。カザフの伝統的天幕。カザフスタン

ると、類似の現象が多くみられることに基づく。視野を広げて現代における宗教復興という問題を考えるため、大学院生や研究員などの若手を中心に、民博共同研究（若手）「内陸アジアの宗教復興」を開始した。

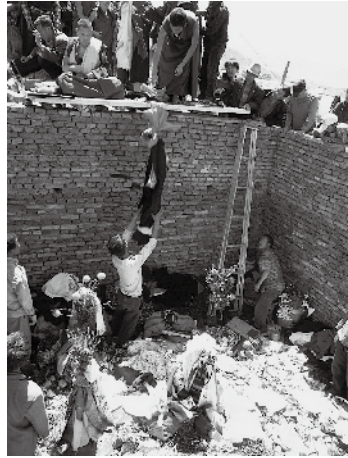
この共同研究では、特に中央アジアからモンゴル、チベット、さらに中国や東南アジア大陸部にかけて広がる多文化世界に着目している。歴史的にゆるやかな連続性を持ち、移動が頻繁に生じてきたこの地域では、イスラーム、シャマニズム、ボン教、チベット仏教、上座仏教など多様な宗教が信じられてきた。これらの宗教は、隣り合ったり重なり合ったりしながら複雑な展開をみせている。



シャマンによる治療儀式。中国内モンゴル自治区（撮影・趙芙蓉）

宗教の復興は、いかに近代化をへても、宗教的観念をまったくぬきにして生と死に対処することは難しいことを示しているのかもしれない。社会主義という近代化のかたちをへて、越境しながら生きる人びとの宗教復興から目が離せない。

仏塔に大量の供物を納めるボン教徒。中国四川省（撮影・小西賢吾）



社会主義をへた宗教復興
内陸アジアやその周辺地域には、二〇世紀になると複数の社会主義国が成立した。社会主義は、基本的に「神はいない」とする無神論の立場をとる。ただし国や時代によって政策には相違もみられ、宗教が完全に否定され続けたわけではない。

たとえば旧ソ連では、一九三〇年代にはげしい反宗教政策がとられた後、一九四〇年代半ば以降はイスラームが限られた範囲内でのみ許容された。一方、中国では共産党政権樹立直後には信仰の自由が保障されたが、その後の文化大革命などで寺院などが破壊され、一九八〇年代から徐々に復興している。チベット仏教やボン教の寺院再建、内モンゴルにおけるシャマニズムの隆盛などはその一例である。

社会主義と宗教のあいだには、相克関係とともに並存関係もしばしばみられ、社会主義体制の転換や終焉とともに宗教が復興

民博共同研究（若手）
「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」
2010年10月～2013年3月
第2回研究会（2011年1月22～23日）では、中国ムスリムの越境と宗教復興、カザフスタンの死者儀礼、モンゴル人シャマンの治療儀礼などに関する発表を予定。

年末年始展示イベント「うさぎ」
2011年の干支である「うさぎ」をテーマに、みんぱく収蔵の資料を中心に、世界各地の「うさぎ」にかかわる興味深い情報をパネルなどを使って、紹介いたします。年末年始の一日を、世界の人のひとと「うさぎ」のつながりを知るこの日を楽しんでみませんか？
会期 2月1日(火)まで
会場 本館展示場内

◆**関連イベント(参加無料)**
実施日 1月10日(月・祝) 無料観覧日

◆**みんぱく教員によるキャリアトーク**
解説 岩谷洋史機関研究員
時間 ①11時～11時30分②14時～14時30分
場所 本館展示場内

◆**ワークショップ**
「うさぎを追って世界一周」
展示場で答えを探して、カメラ付き携帯やデジタルカメラで写して来て下さい。参加者には、展示場にはないうさぎ情報が入った「たんけんカードーうさぎ」をプレゼントします。カメラをお持ちでない方も参加可能です。
時間 10時30分～16時30分(受付16時まで)
場所 本館1階エントランスホールおよび本館展示場
※随時受付

◆**みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)企画「おりがで遊ぼう」干支シリーズ「卯」**
時間 10時30分から7回実施(各回30分、最終は14時40分)
場所 本館1階エントランスホール
※各回定員10名程度(当日受付)
※小学1年生以上対象
お問い合わせ
情報企画課展示グループ
電話 06・6878・8532
(平日9時～17時)

◆**「春のみんぱくフォーラム2011」**
「うさぎの世界へ」
情報をつたえ、感情をあらわし、ひとつなげ、音をたのしむ。ことばにはさまざまな役割があります。そして音声、手話、文字など、それを伝え運ぶための顔も美に多様です。言語展示関連イベント、「春のみんぱくフォーラム2011」ことばの世界へでは、このようにことばへの入口をいくつも用意しました。
会期 1月8日(土)～3月31日(木)

◆**連続言語講座**
「ことばの世界一周」
世界各地のちよつとめずらしいことばの入門講座。みんぱくの教員が中心になり、90分で完結する講座を23言語で開催します。ぜひチャレンジしてみてください。
①「フィンランド語」1月9日(土)
②「ペトナム語」1月10日(月・祝)
③「ブルガリア語」1月16日(日)
④「スワヒリ語」1月22日(土)
⑤「チベット語」1月23日(日)
⑥「タミル語」1月29日(土)
⑦「サン語」1月30日(日)
⑧「タイ語」2月5日(土)
⑨「ルーマニア語」2月6日(日)

◆**公開講演会**
「ことばの類型と多様性」
世界には3000とも6000ともいわれる数の言語があります。これらは互いに異なっていますが、共通する点もあります。本シンポジウムでは、ことばの持つ類型・普遍性と多様性を論じ、ことば現象のおもしろさを理解していただきます。
実施日 2月19日(土)
時間 13時～17時
会場 有楽町朝日ホール
定員 600名(先着申込順)
※参加無料、要申込
申込方法
「第14回公開講演会・シンポジウム参加希望」と明記の上、郵便番号、住所、氏名、連絡先電話番号、今後の講演会などのご案内送付希望の有無を記載し、左記までFAXにてご連絡ください。
FAX 06・6878・8479

申込方法
受講希望の方は言語講座名と開催日を明記し、お名前、所属、年齢、連絡先を以下のメールアドレスまでお送り下さい。
sekai.nokotoba@dc.ninipaku.ac.jp
受講希望講座()にお申し込みください。ことばについての予備知識は必要ありませんが、ローマ字が読める高校生以上のかたを対象とします。講座ごとに定員30名に達し次第、締めきります。

◆**みんぱく映画会/みんぱくワールドシネマ「タレントタイム」**
実施日 1月22日(土)
時間 13時30分～16時20分(開場13時)
場所 講堂
定員 450名
※参加無料、申込不要
※当日10時から会場入口にて整理券配付
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話 06・6878・8210
(平日9時～17時)

◆**東京講演会**
会場 江戸東京博物館 学習室1
定員 50名(要申込)
第95回 1月16日(日) 14時～15時30分
ことばの歴史・ひとの移動史
講師 菊澤律子(民族文化研究部准教授)
語族という言い方を耳にしますが、ことばが同じグループに属するとはどういふことなのでしょう。ことばの分類はなぜ、人の歴史と結びつくのでしょうか。「ことばの連伝子」の分析と応用についてのお話です。

みんぱくはなびミニナル

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第392回 1月15日(土)
「新言語展示関連」
みんぱくエスノログ
講師 庄司博史(民族社会学研究部教授)



世界的な言語データベースともいえるエスノログは7000ものことばの話者数、分布、系統や地位などの情報を提供しています。今回、新言語展示では世界各地の言語を画面上で検索し、さまざまな情報を引き出せる装置を開発しました。公用語、民族語、手話なども含めた、みんぱくエスノログを紹介します。

第393回 2月19日(土)
「新言語展示関連」
日本の文字・世界の文字
講師 八杉佳穂(民族文化研究部教授)



日本の文字は、漢字と仮名を交えて使うところからか、特殊で、むずかしい文字といわれています。本当にそうでしょうか。世界の文字を比べながら、文字の本質とは何か、日本の文字の特徴は何かを考えてみましょう。

友の会

国立民族学博物館友の会 電話06-6877-8893(平日9時～17時) FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)
第391回 1月8日(土) 14時～15時30分
ことばの歴史・ひとの移動史
講師 菊澤律子(民族文化研究部准教授)
第392回 2月5日(土) 14時～15時30分
日本におけるチベット研究のはじまり
青木文教のたどった道
講師 長野泰彦(民族文化研究部教授)
仏典を求めてチベットに渡った青木文教は、ラサ市内で4年間を俗人として暮らしながら収集をすすめました。仏典だけでなく1910年頃の現地の人ひとの生活についての映像資料など、さまざまなものを日本へもたらしました。民博に収蔵されている青木文教の資料や彼の生涯について紹介します。

第393回 3月5日(土) 14時～15時30分
ジャワの芸能にみるマハーバーラタ
講師 福岡正太(文化資源研究センター准教授)
古代インドの叙事詩「マハーバーラタ」は、王位をめぐる争う一族の物語です。インドネシア・ジャワ島にも伝わり、多くの芸能の題材となりました。ジャワ芸能は、登場人物の愛憎や喜怒哀楽をどのように描いているのでしょうか。ヒデオなどを用いてご紹介いたします。

お問い合わせ
研究協力課共同利用係
電話 06・6878・8331
(平日9時～17時)

●**アメリカ展示・オセアニア展示場の閉鎖**
新しく生まれ変わるアメリカ・オセアニア展示場にご期待ください。
閉鎖期間 3月下旬まで

●**休館日・無料観覧日のお知らせ**
年始は1月5日(水)まで休館します。

1月10日(月・祝) 成人の日は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合、入園料が必要です。

◆**みんぱくラジオ「世界を語る」**
みんぱくの研究者のお話をラジオでもお楽しみいただけます。
ラジオ大阪(1314kHz)
毎週水曜日 23時30分から24時

◆**毎日新聞夕刊連載「旅・いろいろ地球人」**
みんぱくの研究者のエッセイが毎週水曜日に掲載されています。

※詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■土方久功著 須藤健一・清水久夫編
『土方久功日記Ⅱ』
国立民族学博物館調査報告 NO.94

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

今年の冬は暖かいアルパカと過ごしませんか

いま南米のアルパカをつかったセーターやカーディガンや手袋、ベレー帽や耳あて帽などをたくさん取り揃えています。
生後1年のアルパカの産毛は「ペビーアルパカ」とよばれ、非常に柔らかく、保温性に優れています。それをつかった製品は、寒い冬でもほっこりあたたかく、冷えた体と心を包み込んでくれるでしょう。
お気に入りのアルパカを見つけて、ぜひ、ミュージアム・ショップにお越しください。



アルパカの人形 2,625円～
ベスト 12,600円～
手袋 1,575円～
ベレー帽 1,575円～

ニポートングトウ
寧波滕頭実践例館
上海万博より

よこやま ひろこ
横山 廣子 民博 民族社会研究部

寧波滕頭実践例館の外観



二〇一〇年一月三十一日、一八四日間の上海万博が、のべ入場者数約七三〇〇万人を記録して閉幕した。わたしが訪れた八月末は連日約五〇万人の人出で、当初の計画とまち時間とを秤(はかり)にかけながら見学した。その結果、雲南ウィークの各種催し、日本館など一〇館ほどの国家館、中国省市区連合館内の十数館、大阪を含む、ベストシティ実践区内の世界各都市の展示館を見ることがになった。

農村を展示した唯一の館

特に印象に残ったのは、寧波滕頭実践例館。都市単位で生活の質向上のための実践プランを展示するベストシティ実践区で唯一、中国浙江省寧波市にある滕頭という人口約八三〇人の村に焦点を当てていた。

典型的な江南の農家をおもわせる二階建ての展示館は、外壁に一〇〇年以上前のものも含まれる古い瓦(かわら)やレンガが使われていた。関係者が半年かけて村の周辺各地で集めたという。そこにも感じられる歴史、自然、人間が結合して生まれる妙味が、館内の随所で感じられた。

五感に働きかける展示

入館者はまず、二階へとスロープを上っていく。途中、コーナーごとに鳥や虫の声、風の音など自然のいろいろな音が聞こえてくる。それらは二十四節気を象徴しているとのこと。

階上のオープンスペースには水田があつて、緑の稲穂が心を和ませる。七〇〇〇年前の稲の栽培が確認された河姆渡遺跡も寧波市にある。五分ごとに霧が噴き出し、虹が見え、係員が放った蝶が稲穂のあいだを舞う。

一階にある映像ルーム前では、観客は靴にカバーをつけさせられる。入室すると、床に横になることを勧められる。天井が大画面と化すその



透明の河姆渡遺跡解説パネル越しに広がる、豊かな水と緑の空間

とき、突然、床が波立つように上下し、次に部分的にせり上がり、マットサージチェアのように揺れ動いた。この床下に設置された気圧装置のおかげで、村の景観を見ながら心地よいひとときが過ぎていった。

「より良い都市、より良い生活」の上海万博のなかで

八〇年代以降、発展を重ねた滕頭村は、二階のこじんまりした室内で紹介されていた。パネルのサイズ、解説の長さ、文字の読みやすさ、写真と文字のバランス、何気ないようで、すべてがほどよく、最後は、エコと人びとの和を大切にす滕頭村が世界に向けた宣言で締めくくられる。わたしには非常に興味深い展示だった。しかし、一緒に入館した中国人たちは素通りするばかり。

その姿に、わたしは今回の万博のテーマ「より良い都市、より良い生活」を思い出した。そこに、ホームページさえも備える滕頭村の頑張りがあっても、全体としては圧倒的に都市に対して向けられている現在の中国社会の視線を感じてしまっているのである。

みんぱく 私の逸品 蚊取り線香

蚊取り線香というと、大抵の人は渦巻型を思い浮かべるのではないだろうか。ところが、みんぱくの収蔵庫にあった蚊取り線香は、筆箱のような箱のなかに紙に巻かれた束が並ぶものであった。

わたしが子どものころ、夏の夜の必需品のひとつが渦巻型の蚊取り線香であった。蚊取り線香というと、豚の形をした容器に吊るして使う方法が紹介されることが多いが、我が家にはそのような洒落たものはなく、商品に付属した金具を使っていた。線香の中心に空いた穴に金具の先端を突き刺す作業が面白くて、わたしは進んでその作業をしていたのだが、仏壇の線香は棒なのに、なぜ渦巻き型を蚊取り線香とよぶのかと自問自答して、色が似ていて煙を立てることが同じだからだと納得した記憶がある。

その後、民俗資料を扱うことが仕事になり、蚊取り線香は、明治一〇年ごろに日本人が発明したものであることを知った。原料の除虫菊は、欧米では粉末にして撒かれていたのだが、これに火をつけて燻すとさらに効果があることを発見し、仏壇の線香からヒントをえて、粉末を棒状に固めることで製品化に成功した。しかし、棒だとすぐに燃え尽きてしまう。長時間燃やし続けることができないかと考えた結果、約一〇年後に考え出されたのが渦巻型だという。

ひとむかし前の博物館は、特別に古くて、優れていて、珍しいものを扱うところであった。みんぱく誕生のころから、そうではない日常生活の用具も大切な博物館資料であると考えられるようになったのだが、そのころには多くの生活用具が姿を消していた。とくに消耗品は残されていることが少なく、わたしは写真でしか棒状の蚊取り線香を見たことがなかった。

紙箱のなかの束をひとつ手にもってなかを覗くと、深緑色の棒が詰まっていた。その長さ、色合い、質感から、仏壇用の線香を真似て作ったことは一目瞭然である。実物を残しておくことの必要性を実感した一瞬であった。

標本番号 H0237009
地域 日本

民博 外来研究員 吉田 晶子



スリンの「異世界」を 逍遙する

津村 文彦
つむら ふみひこ
福井県立大学准教授

タイでは、マスメディアの影響などで、お化けやまじないが東北部の地方イメージとしてすっかり定着している。なかでもカンボジアと国境を接するスリン県は、まじないのメッカといってもいいほどだ。スリンには、カンボジア語と同じ系統のことをばを話すクメール系民族の呪術、邪術の使い手たちが、とくろを巻いている。



象以外のもうひとつの名物

タイのスリン県といえば象祭りが「名物」だ。地域振興のため一九六〇年代に始まった毎年一月の象祭りには、タイ全土から象と象使いが集結する。象サッカーや騎象戦などが催される。世界中から観光客も訪れる。そんなスリン県のプラーサート郡に足を運んだのは、二〇一〇年三月のことであった。じつは、もうひとつのスリンの「名物」が目当てであった。

スリン県にはクメール系民族が多い。東北タイのラオ系民族のあいだでは、クメールの多い地域に行った人が原因不明の病にかかると、「呪術にやられた」とみなされ、「クメールに当たる」と語られる。滞在中世話になったクメール系の知人の家でもこんなことがあった。娘が他県の大の友人たちを自宅に招待していたが、直前になって突然キャンセルされた。「呪術が怖いからやめておくように親にいわれた」からだという。クメール系ではない多くの「タイ人」にとって、スリンは、強力な呪術のはびこる、「異世界」として認識されているようだ。

タイやラオの呪術は弱つちい

スリン県プラーサート郡の村落を案内してもらいながら歩いてみた。生活態度の悪い嫁に使い魔を送って呪い殺したという姑呪術師の家、シロアリの塚を壊したために土地神に呪われてしまった教師が勤める小学校、村の女性と結婚した白人が墓場の上に建てて悪霊が出没する西洋風住宅など、背筋の寒くなるようなエピソードが、村のなかの個別の場所と結びついて次から次へと語られる。

「ルーシー」とよばれるむかしの修道者を取り憑かせて日常の些事を占う占師やら、深い腹想に入って「心を脱ぐ」と遠くの場所に自らを顕現させることができるという八七歳の老呪術師なども村に住む。「ラオの村では『クメールの呪術は強力だから注意しろ』とよく語られる」とわたしがいうと、その老呪術師はニヤリと笑った。「たしかにタイやラオの呪術は弱つちい」。

だが「プラーサート郡の呪術はたいしたことはない」とも当地では語られる。もっと強力なのは、象使いで有名なクイ族、それに「低いクメール」の呪術だという。「低いクメール」とはドンラック山脈の向こう、つまりカンボジアに住むクメールを指す。その老呪術師は、若いころカンボジア国境の森に入って薬草の採集に勤しんだ。森には「低いクメール」の呪術師もいて、彼らから呪術や薬草の処方を受けたという。

プラーサート郡から南東に五〇キロほど国道を進むと、カンボジア国境チョンチョムに至る。国境の少し手前に市場があった。なかに入った途端、女性の物乞いが近づいてきて抱いた子どもを見せる。一歳ほどの男の子の膝には大きな裂傷があり、蠅がたかかって黄色く変色した傷口の奥には白いものまで見える。そこを過ぎると「一パツでいいからおくれ」とタイ語で乞う少年たちに取り囲まれる。市場の売り子も、ほとんどがカンボジアからやって来た「低いクメール」である。古着、日用品、電気製品、中古自転車などが店先に並び、なかには呪術の道具も売られている。ナーリボンとよばれる人の形をした呪具は恋愛呪術に用いられるという。

オスマックのカジノでタイ人に勝ち目はない

市場では、この場に似つかわしくない小綺麗に着飾ったタイ人グループもしばしば目にする。大型バスに乗って、団体でこの地を訪れる彼らの目当ては、もちろん市場ではない。カンボジア側の国境の街オスマックにあるカジノである。週末には多くのタイ人が「攫千金を夢見て押し寄せる」。「あのカジノの中央にある柱の下には、（低いクメール）の呪術師が埋められている。だからこれだけ多くの客を集めているのだ」プラーサート郡の知人が教えてくれた。「低いクメール」の強烈な呪術の庇護下にあるカジノでは、タイ人に到底勝ち目はないだろう。



占師の憑依。はるかむかしの修道者ルーシーをとり憑かせて占う

装身具に混じって、市場で売られる呪具ナーリボン



寺院での悪運払い儀礼。仏像・僧侶と信者が聖糸で結ばれる



車を止め、歩いて国境を越えて、カジノに向かう



老呪術師と彼が受け継いでいる呪術書

言語・文化の交流の場「あおぞら教室」

わたしが授業の見学に訪れた日には三つのクラスが開かれていた。

ひらがなをカードでパズルにして日本語の単語を作り上げる初級クラス。中国から来日した人たちが、手にした文字から始まる日本語の単語を見つけようと必死だ。今日はトウさんがとても喜んでいて楽しそうだ。トウさんは中国から六年前に来日、中華料理屋で働いている。

他のクラスでは、イギリス人のアダムさんが流暢な日本語で悩みを訴える。「『あなた』のことを『自分』というなんて、ぼくにはとても難しいです」。なるほど、こちらのクラスでは地域方言と標準語の違いを勉強しているのである。手作り教材のプリントには「あかん——ダメ」「ええ——いい」「ほかす——すてる」といった同じ意味の単語が、関西弁と標準語でリストアップされていた。

アダムさんはイギリスの大学で日本語を専攻し去年の九月に交換留学で来日した。今は大学の授業を受ける一方で、このあおぞら教室にも通う。ホストファミリーが使う関西弁を理解するためだ。

もうひとつのクラスのテーマは日本の迷信について。日本では霊柩車を見た指をかくす、寝る際に北に向けて枕をおかない、といった外国人にとっては物珍しく、驚きのテーマは尽きることがない。内容もそうだが、その根拠のほうに気になる学習者たちの質問が絶えない。考えてみれば、自分の国にもよくある話である。イギリスでは新しい靴をテーブルのうえにおいてはいけないらしい。台湾では傘を室内で差すのは縁起悪いことだ

たちの机を数名の学生たちが囲むように座り、日本語学習を支援する方法をとっているのである。二〇人あまりのボランティア支援者があり、マンツーマン以上のきめ細かい日本語支援が可能になる。学習者にとって、得難いものであるにちがいない。

教えながら学ぶ

しかし、この教室でもっとも印象深いのは、支援する学生たちの気負わない態度である。授業では教師と生徒のあいだでの教える・教わる関係というより、ともに学ぶという姿勢がとてさわやかであった。中島教授は「あおぞら」に参加した学生の様子について、外国人の日本語学習を支援し、日本の文化を伝えるという活動をおして、自身も異文化について学び、異文化に対する興味をふくらませて、さらに異文化との触れあいが自己文化を見直すきっかけになっていると説明する。また、こういった自主的な活動によって、学習者たちの希望やニーズに応える教授法が工夫できること、つまり教えられた日本語教授法ではなく、自分自身にとって理想的な日本語教授法を頭に描ける教師に育っていくことにこの「あおぞら」の経験が生かされているという。

学生たちは他にもたくさん学んでいるようである。「あおぞら」の学習者は、一般的な日本語教室とは違って留学生から地域の住民まで多様な背景をもつ。またアジア圏から西欧圏まで国籍もさまざまである。日本語能力が十分で生活環境に恵まれた人もいれば読み書きができず日本社会のシステムから疎外されている人もいよう。「あお

多文化を
ささえる
人びと

日本語を伝え多文化を教わる ——甲南大学日本語教室「あおぞら」

毎週火曜日と木曜日、甲南大学文学部の講義がおわるころ、外国人が一人、二人と教室に集まり始める。

地域に生活する外国人が日本語を学びに来るのだ。

日本語教室の名前は「あおぞら」。甲南大学の学生が主体になって開いている。

キン ミソン
金 美善

民博 外来研究員

そうだ。クラスはあつという間に多文化交流の場になっていった。

手作り日本語教室

「あおぞら」は地域に生活する外国人の日本語学習を支援するために作られた日本語教室である。甲南大学文学部日本語日本文学科の中島教授の指導のもと、二〇〇四年から活動を開始し今年で七年目を迎えた。教えるのはほとんどが日本語教員養成課程の学生たち。なかには韓国や中国からの留学生もメンバーとして活動に参加している。一回の授業は九〇分、六時から七時半まで大学の講義が終わってからの活動である。春と秋、一年を二期にわけ、週に二回開かれている教室はすべて学生たちのボランティアにより運営され、授業料は無料である。二〇〇六年に発足した大学のコミュニティ・デザイン・センター(CDC)を通じて経費の支援を受けている。

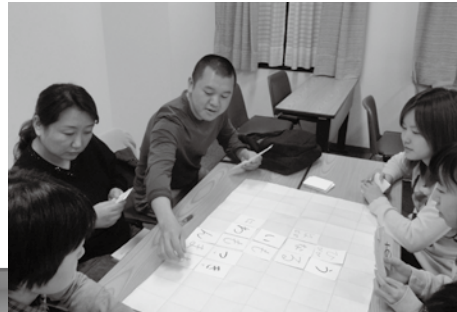
授業の内容は日本語日本文学科共同研究室の日本語教育に関する書籍を参考に学生たちがグループで話し合っって検討する。もちろん先輩たちの経験も重要である。また、前もって学習者に学びたい内容を聞き、それにあつた授業計画を立てるときもある。教材は、学習者のニーズや学力に合わせて毎回別ものが用意され、定型テキストは用いない。学習者それぞれの言語環境や日本語能力の格差に配慮したためである。

クラスは初級と中級に大別するが、学習者の能力や参加状況によってはさらに小さい単位にわけ、能力ごとにグループを設けることもある。学習者

ぞら」にはこういった日本に生活する多様な外国人像そのものが凝縮されているように思えた。学生たちが日本語の支援を通して学ぶのはことばの違いや文化の違いだけではなく、これら日本社会の一断面から広がる柔軟で広い世界観でもあろう。

「多文化共生」は今やすっかり流行のことばになっている。マスコミも書物もこのスローガンで日本の多文化社会への変化に対応しようとしている。しかし、かつての「人権教育」が「多文化共生」に名称を変えただけで、外国人を「同情的対象」に画一化しているような不自然さがぬぐいきれないのも事実である。「あおぞら」の活動にその不自然さがあまり感じられないのは、外国人を画一化することなく、互いに学びあおうとする学生たちの考え方のあらわれだと思つた。まさに「多文化共生」をスローガンなしで実践しているのである。

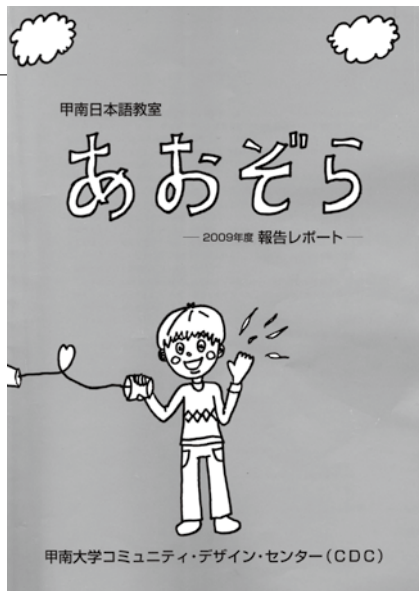
中島先生の研究室に集まり授業の準備をしている学生たち



初級クラスの授業風景



中級クラスの授業風景



年に一度活動報告書『あおぞら』を出している

年賀の薦樽

こもだる

旧家の正月を飾ってきた薦樽。生活習慣の変化で最近目にする機会はすっかり減ってしまったが、入念な手作業で造りあげる職人の心意気は、今もなお変わらぬ。

前か後か

まずは年頭初笑い。むかし一世を風靡した『冠婚葬祭入門』的な質問をしよう。

元日のお神酒は、届いた年賀状を讀む前に飲むのか、読み終えてから飲むのか。それとも、読みながら飲むのか……。

正解は、ハテ。

除夜の鐘が響き、年越し蕎麦を食べながら飲むその延長で、明け方まで飲み続ける人もいることだろうが、それは論外。律儀な人間関係を遵守する人たちのあいだでは、今も「お年賀」と称して実家のある郷里に集う。一方では、地縁より社縁にすがって上司宅訪問を先陣争いする慣

例もある。

神事に做うなら、お神酒ふるまいは賀詞交換を終えてから。だから、読み終えてから盃をとるのが正解なのだ。ただし、年賀状は、年始参りの口上を端書に認め、人手を介して届ける横着な便法として瞬く間にひろまったのだから、読みながら飲む無作法も非難には値しない。口上の巧拙や子煩悩ぶりを香に飲む酒の味はひとしおだ。

日本の正月儀礼に欠かせないお神酒。元旦にだけは、年端もいらない子どもたちにもお神酒が一献ふるまわれた（わたしが幼稚園児だったころの我が家ではそうだった）。

元日また三が日にいただくお神酒は、本来は屠蘇酒といって、百虎

桔梗、肉桂、山椒などの生薬を調合した屠蘇散を入れた袋を、日本酒や味醂に浸した薬用酒だった。来る一年間の邪気を払い、延命にも効力ありと信じられていた。だから「屠蘇延命散」とも称されてきたのだが、平均寿命が長くなりすぎた現代人の味覚には、なじまなくなつたらしく、屠蘇酒はすたれつつある。それでも、歳末に屠蘇散を仕入れておく酒店はある。スーパーマーケットでも買えなくはない。

えつ、蕪蓄はもういい？ それより薦樽はいつ出でくるのかだつて？ さすが、左党だねエ。薦樽の鏡開きとは威勢がいい。杵は揃えたかい、小槌はどうだい？ 杵と塩の用意もいいか？ おっと、柄杓が足りないじゃ

造変化とレトルト食品の氾濫で、すっかり生活習慣が変わつてしまつたものだから、今日、民俗調査で年の瀬・年頭近い農山村を訪れてみて、土間の上框近くに「幸木」を飾っているところはほとんど見かけなくなつた。切身の塩鮭を冷蔵庫に入れてあるので、新巻鮭の一本も見かけることがない。特に、都市とその近郊住宅地では……。

そのようなところに建つ3LDKの上司宅で、薦被りの四斗樽からのお流れに与するうたつて、それは、所詮、無理な話だ。部長が桐箱入りの一升瓶をおもむるに取り出してきたら、それだけで今年は安泰だと悟るべきである。注がれても、自重して三杯目のお流れをいただくことは戒めるべし。奨められても留まるが吉。

入念な手作業で

ところで、よくありがちなのがミニ薦樽入りの地酒。観光みやげだから造作は粗い。印薦の素材も安価なイミテーションである。本当の薦樽は、今も入念な手作業で、天然の素材を活かしながら数々の行程を経て生産されている。わたしが酒造用具調査に参加した当時、伏見や灘の大手酒造会社が発注していた商標銘柄入りの印薦は、梗米の藁を編んだ粗

ないか。

「家業統」の証し

年始参りにそなえて薦樽を用意する本家ともなれば、分家の数も半端ではないだろう。婚出子とその子どもたちも、皆、それぞれに着飾って訪ねてくるのだから、お年玉袋の数もさぞかしかさむことだろう。でも、それこそが、柳田國男が理想とした「家業統」の証しだったはずのことなのだ。薦樽の容量は四斗（約七十二リットル）。一升瓶四〇本に相当する。この途方もない大量のお神酒を一夜で飲み明かすほどの、空樽にしてなおあり余るエネルギーが、往年の旧家にはあった。台所まわりの構

薦を材料にしていた。これに布海苔を塗布して白砂（灘地方では甲山から採取した山砂といっていた）を擦り込んでなじませながら、手数をかけて表面を磨き、塗料のりやすくなるように平滑化していく。そのように手間をかけて仕上げた表面に、柿渋を塗って補強した型紙を当てて色づけをするのだった。

このとき使用する型紙は、典具帖紙といふのか、藍染に使う型紙と似た孔版印刷用の硬い型紙である。刷りあげた印薦は、天日乾燥させてから樽に巻いて縫い綴じる。そして、最後に縄をかけて薦樽が仕上がるのである。

印薦造りは、民芸品まがいのミニ樽と大手酒造会社の量産品以外は手作業だから、職人一人が一日に仕上げる枚数は、熟練した人でも十枚枚だと、伏見では聞いた。そして、印薦職人たちの多くは、酒造をはじめとする醸造業が盛んな都市近郊農民たちだった。秋の収穫を終えてからの副業だったという。

最後に、印薦職人たちからのホンをひとこと。

心をこめて、苦勞して造りあげた印薦。なかでもとびきり上出来と思える十数枚は、神様への奉納酒樽用にとつておく。「もつたないから、人間には渡さない。」



刷りあげた印薦をていねいに縫いとじてゆく(辰馬本家酒造にて)

ミャオ／モン女性をとりまく 刺繍と文字

みやわき ちえ
宮脇 千絵

総合研究大学院大学博士後期課程

刺繍は「日記」か？

中国雲南省に居住する少数民族ミャオ族（自称モン）は、その衣装を装飾する刺繍の華やかさで有名である。先行研究では、刺繍には文字の機能があると説明している。ミャオ族は独自の言語を有するが、文字をもたなかったため、読み書きができる人はほとんどいない。そのため刺繍の図案は、ミャオ族女性の日々の出来事をつづる「日記」のような役割をもつと解釈され、ミャオ族のなかにもこの説を受け売りする者もいる。

しかし調査をすすめるなかで、わたしはこの定説を誇張ではないかと考えるようになった。女性たちに尋ねても、刺繍と文字の関係どころか、図案の名称や意味さえ明確な答えは返ってこない。また彼女たちは、刺繍の図案を自分で創造するよりも、他人の衣装にほどこされた刺繍を見本とし、模倣することのほうが多い。刺繍の図案は確かに、花や蝶、鳥といった身近な自然をあらわすものが多いが、とても日々の出来事をつづる「日記」だとは思えなかったのである。

能力を引き合いに出し、それらを対比させたのである。

「本を読み始めたから刺繍をしなくなった」

その後わたしは、アメリカでモンの人びとと交流する機会をえた。モンとは、雲南省のミャオ族をルーツとする東南アジア大陸部に居住している人びとで、ベトナム戦争後の一九七六年以降は難民として欧米にも移住している。アメリカで知り合った四〇代のモン女性は、ラオスで生まれ、八歳のときに難民としてフランスに渡り、そこで博士の学位を取得した後アメリカに移住した。高学歴であり、モン語・フランス



隣家の洗濯物の刺繍の図案を真似する女性



雲南省農村のミャオ族女性たち

「文字を知らないから服を作る」

雲南省のミャオ族のあいだでは、この十数年で服作りに変化が訪れている。定期市で綿や化

語・英語のマルチリンガルでもある。

彼女に服作りについて聞くと、「ラオスでは母親から刺繍を習っていた。初めて自分で刺繍をした帯は今でも大事に置いてある。でもフランスに行つて本を読み始めてから刺繍はしなくなった。」とのことであった。彼女は本を読むことが、刺繍に取って代わったと説明したのである。思いがけず、異なる地域で、まったく異なる人生を歩んできた同年代の女性二人から同じ意味合いの発言を聞き、両者の繋がりを感ずるとともに、再び刺繍と文字の関係が気になるようになった。

刺繍と文字の関係

それでは、刺繍は本当に「日記」なのだろうか。前述の二人の発言からは、少なくとも刺繍をおこなうことは、文字の習得に置き換え可能な行為だと考えられているといえるだろう。しかしやはり刺繍が日々の出来事をつづった「日記」だとは思えない。刺繍の出来栄は、常に女性たちの話のたねである。評判のよい図案は、その名称や意味が顧みられることなく、「きれい」「好き」という感情の優先によって、真似し真似され流行のごとく広まっていく。「日記」というよりむしろ、ミャオ族女性同士の交流の軌跡だととらえられないだろうか。

ところで最近、雲南省のミャオ族のあいだで、文字の刺繍をみかけるようになった。漢字で自分の名前や「北京奧運会（北京オリンピック）」など世相を反映した文字を刺繍したり、意味も

織の布が入手できるようになり、染織をする者は減った。しかし場所や準備の手間がかからない刺繍だけは、農作業の合間の仕事として中高年の女性はもちろん、一〇代の少女にも日常のおこなわれている。

調査中のある日、新年にむけて服作りをする居候先の母親の隣で、わたしはフィールドノートの整理をしていた。普段からわたしはメモを書いたり、本を読んだりするのを、女性たちはどう感じているのだろうと思っていた。好奇心をもってわたしのノートを覗き込んでくるのは、学校教育によって漢語（中国語）を習得した男性や若者ばかりで、女性にはわたしの読み書きの行為と距離を置いている気がしていたのだ。そんなとき、居候先の母親が何気なくつぶやいた。「あなたは本を読んで、わたしは服を作る」。「わたしは一度も学校に行つたことがないから文字を知らない。だから刺繍をしたりして、服を作るしかない」と。これはわたしにとって、印象的な台詞だった。彼女は、自分の衣装製作の状況を説明するのに、わたしの識字



スカートにほどこされた「Pleasure」との刺繍は、図案か文字か？



刺繍はクロス・ステッチ技法である

知らずに英文を刺繍していたりする。これも流行中の図案のひとつとみなすべきか、それとも文字を習得した若い世代から発せられた「刺繍と文字の融合」というあらたな現象だとみなすべきなのか。まだまだ気になる問題である。

1月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別！

どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

9日
(11日)

話者：田村克己（民族社会研究部教授）

話題：ハノイのえべっさん

場所：本館展示場内東南アジア休憩所

16日
(18日)

話者：宇田川妙子（民族社会研究部准教授）

話題：イタリアの家族の現在

場所：本館展示場内ナビひろば

23日
(25日)

話者：池谷和信（民族社会研究部教授）

話題：森と人のかかわりー日本からアマゾンへー

場所：本館展示入口

30日
(1月1日)

話者：新免光比呂（民族文化研究部准教授）

話題：バルカン半島の諸言語と慣習

場所：本館展示場内ナビひろば

1年間みんなくは何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

敵から逃れるための大きな耳と逃げ足に加えて、発情周期を短くするという戦略を選んだウサギの繁殖率は高い。スポーツハンティング用に白人がオーストラリアにもち込んだウサギが、天敵の少ない新天地で驚くほど増えて牧草地を荒らし、困った白人がウサギよけフェンスを張り巡らしたが結局役立たなかった、という話は、本誌2003年12月号『裸足の1500マイル』で紹介した。ウサギが多産、豊穰、性のシンボルとなったのもうなずける。これら特性を映した各文化におけるウサギ観は、特集で論じられているとおりだ。

ちょうど今、展示場でもウサギを論じている。2月1日まで開かれている年末年始展示イベント「うさぎ」では、本号で写真を掲げたものも含む標本資料約50点のほか、教員が各地で撮影したウサギと人のかかわりを示す写真や動画、関連する書籍も展示される。

特集冒頭にある「兎の角論」は、ありえないものごとを指す「兎角亀毛」ということばからきているそうだが、何でもありの現代、頭をやわらかくする年初にしたいものだ。(久保正敏)

●表紙：月にすむとされるウサギをあらわした玉兎。張り子人形
(日本 福島県) 標本番号 H0013154

次号の予告

特集

鬼はソト、鬼はウチ

月刊みんなく 2011年1月号

第35巻第1号通巻第400号 2011年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 朝倉敏夫 榎永真佐夫
庄司博史 中牧弘允 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一孝

制作・協力 財団法人千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

